

第十八世紀西歐女性觀の一典型の研究（中）

石 塚 勝 雄

七 （註一）

本節は、性的衝動をめぐって男女の心は相互にどのように動くものであるかについて教えてたものである。事柄自体が微妙でもあり、著者が婉曲な表現をとっている箇所もあり、難解である。著者は著者なりに教えているわけのだが、それは男としての著者の個人的体験に基いていると思われる部分も多く、筆者としてもこの種の事柄には個人差が相当多いのではないかと思っている。そこで本節の研究は、著者の教訓の意味するところを理解する程度に止めたい。初めに理解の便宜のために本節の趣旨を端的に言えば、結婚前の異性との交友関係において、純潔な処女性を失うことのないようにとの親心から、細心の注意を与えたものだと思う。なお本節の説き方は、前後の意味上の接属関係が必ずしも明瞭でなく、ところどころ途切れた恰好になっている。その途切れたままに区切って考察し、その間の意味上の接属は筆者が適宜補ってみることにする。

第一部

『会話の中のみだらな言葉は、どのような種類のものであっても、それ自体が恥ずべきものであり、その上われわれ男性にとってひどくいやらしいものだと思ひなさい。すべて二様の意味にとられる言葉〔double entendre〕もこの種のものである。』

初の文章は、女が卑猥な話をするそれはそれ自体が不道徳であるばかりでなく、男にとって鼻持ちならない不快感

を与えるものだから絶対に止めるべきことを婉曲に訓えたものであろう。つぎの文章は一寸難解である。卑猥なことをむき出しの単語や言い廻しで話すことは、どんな人でも気がさすものだから、こういうことについては遠廻しに、あるいはばんやりと、時にはわざと上品な言葉でそうしたことを示唆する表現が、日本語などでも相当発達しているようであるが、これは西欧語などでも同様なのであろう。そうした言葉で卑猥なことを語るのも、同様によろしくないのでこの文章は訓えたものであろう。つまり、どんなにお上品な表現を用いようとも、卑猥なことを話類にすることは絶対禁止の意であらう。

第二部

『男の素養の放蕩性は、それとは別に男が身につけている一種の分別さで外^{そと}らされるような具合になっているものなのだ。その分別さは大変繊細なもので、女の口からみだらな言葉が出たり、それを女が苦痛も軽蔑もなしに聞く時などは、ぞっとさせられほどのものなのだ。』

この箇所も一寸難解である。女の猥談は絶対禁止と前段で命じておきながら、男は猥談どころか放蕩的に振舞った^たりするのは余りにも身勝手ではないだろうかという抗議的質問を想定して、それに弁解的に答えているのがこの箇所^こで、そのつもりで読むと分ると思う。ただ余りに素朴的・体験的に述べられているため弁解的に聞える恐れもあるの^ので、もっと明確な論理的な表現にするために、ジンメル^(註二)の両性観^{りょうせいかん}を藉^{かり}りて筆者がこの辺りを平易に述べればつぎのようになるであらう。

「男性は一元的克服を指向しながらも、理念と生(平易に言えば善悪・美醜)が二元的に対立し、常に抗争する場なのであるから、醜悪なる面が生^{なま}の形態で露呈される場合があるのは、さわめて自然であると言わなければなら^なない。そこで、男は醜悪なるものを好むとか、男の意を迎えようとするならば、女の方でも醜悪面を露呈すべきだと^とか、男の全存在が醜悪なものだとか、考えることは何れも大変な誤りである。男には醜悪面に対極的な高貴なもの

が存在することを知らねばならない。

「女性とは理念と生とが先天的に一元的統一を保っている存在であり、それが言わゆる「美しき魂」(die schöne Seele)へと指向する場なのである。別言すれば、生の自然的衝動そのものが次第に道德的に美的に高められて行く過程なのだから、その自然的衝動(醜惡なもの)がむき出しの形で露呈されることは、女が本来の道程にある限り、絶対に容赦されないことになるのである。」

第三部

『処女の純潔性は、ある種の事柄に触れば必ずや汚染しないではおかぬような脆い性質のものなのである。このような事柄を避けることは、常にお前たちの力の中にあるのですよ。』

処女の純潔性は言うなれば、罌粟の花びらのように脆くはかない。しかし心配は要らない、後で教えてやるが(第十一節)女性特有の天真爛漫さの中にある生来の威厳がそれを守ってくれるのだからと、娘に安心を与え自信をつけさせようとしているのであらう。

第四部

『お前たちはいやに上品振っているというわけで、おそらく悪口を言われるだらう。男たちはお前たちの慎しみに対して不満でもあらう。娘の淡泊な態度はかえって愛くるしくするものだ、と男たちは自信ありげに言うだらう。しかし、私の言うことを信じなさいよ、男たちがそう言う時決して真面目でないんだから。淡泊な態度がお前たちを仲間として気持のいいものにする場合もあるだろうが、女として愛くるしくはしない、と私は認める。これは重要な区別であるのに、多くの女性は気がついていないのだ。』

前段で、処女の純潔を守り抜く力は自然にそなわっていることを教えたのだが、現実には男に言い寄られた場合にとるべき態度を教えたのがこの箇所である。男というものは女を口説くことのむずかしさを十分承知しているので、あ

の手この手で攻め寄せて来るであろう。しかし、その攻め口がどうであろうと、こちらとしては終始一貫淡々たる態度をとれ、と著者は教えている。男としての自分の体験から割り出した教訓なのである。

本節は、男性を見る目を教え、処女の純潔を高唱し、性衝動をめぐる異性との人間関係について教え、異性との清き交わりの秘訣を教えている。社会科学的に見れば、当時の貞操重視の思想を背後に、ほのかにのぞかせてはいるが、日本の父・娘の間などでは到底考えられない高度の教訓だと思う。

(註一) 神戸女学院大学論集 第十卷 第二号一六頁に続く。

(註二) G. Simmel, Philosophische Kultur, 1923, Kap. III.

八

『目下わが国の紳士達の間に流行しかけている一種のお上品そうな贅沢があるが、わが国の御婦人達は世界のどの国の御婦人達とも同じように、今のところその贅沢には染ってはいない。彼女達が何時までもそのようにあらんことを、女性の名誉のために、私は望むものである。それというのも私が言うのは食道楽のことなのだから。食道楽は男の卑しむべき、自分本位な悪徳であるが、それが女性となると、下品でいやらしく全く言語道断である。』

まず事実問題から始めると、この遺訓が実際に書かれたと推定される一七七〇年頃のイギリスでは、紳士仲間の間で食道楽が流行しかけていたという事実である。その原因としては先進国である当時のイギリスでは資本主義も漸く軌道に乗って支配階級には富が蓄積され始めたこと、近代的享楽主義が抬頭し始めたことなどが、一応考えられないこともない。それとも単なる一時の流行にすぎなかったものか、その原因の探究は、本論の性質上省略する。つぎは、その食道楽が当時まだ婦人の間に波及していなかったという事実である。これは当時の婦人解放思想は一部有識者間のものに過ぎず（このことは次節で論ぜられる）、未だ実現の緒についていなかったことを示すものである。と

いうのは、一般に趣味・娯楽・道楽・遊戯の類は男が始めたものが多く、それが婦人解放と共に女性にも伝播・波及して行くのが東西軌を一にしているからである。

ところが、そうした趣味・娯楽・道楽・遊戯の類のすべてが、婦人解放の程度に正比例的に一樣に伝播・波及して行くわけではなく、その間に大分差があることは周知の通りである。その差を生ずる原因としては、男女の本性の差異・男女の労働（仕事）の質の差異など一応考えられるが、その探究は本論に直接関係がないので省略するとして、本節で取り扱う食道楽についてみれば、女性側にも押し寄せそうな気配がきわめて濃いと言わなければならないまい。これには経済問題がからむとしても、男女の舌に本質的な差異はないと考えられるからである。その危険性をおそれ、事前にそういうことのないようにと著者は祈願しているわけである。それというのも、グレゴリ博士によれば食道楽は大変卑しむべき悪徳（vice）であるばかりでなく、それが女性となると更にいまいましい悪徳となるからである。

男女に限らず食道楽そのものを著者がきびしく難詰している口調はあまりにも主観的・感情的であると思う。しかも食道楽と訳した原語は食事の贅沢（the luxury of eating）であり、日本語の食道楽より軽い意味かも知れないのである。日本語の道楽は語源的には「道として楽しむ」・「楽しみを道とする」などの意であらうし、したがって好ましくないという消極的価値判断を含んでいる言葉で、適訳ではないかも知れないのである。何れにしても、男においては、「卑しむべき自己本位な悪徳」（a despicable selfish vice）だとか、女においては、「下品でいやらしく言語道断」（beyond expression indelicate and disgusting）だとか、根拠を明示せずに断定を下している。これでは普遍妥当性がないばかりか、教訓としても高度なものとは言えない。

しかし、感情的判断にしても実際は背後に何等かの根拠があるわけであるから、またこれは同時に現代の問題でもあるから、筆者の推定する二、三の理由を挙げて簡単な考察を加えることとする。先ず第一に感覚にうったえる趣味

だから低級だという理由が考えられる。^(註一)しかし自然(神)から賜った人間の舌は毒物や不適当な食物を排斥するだけのものではなく、また美味は唾液の分泌を促すだけのものではなく、そこに喜びや慰安や趣味を見出すことも、ある程度まで赦さるべきことなのではなからうか。新約聖書の言葉「しかし食物は、信仰があり真理を認める者が、感謝して受けるようにと、神の造られたものである。神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない。」^(註二)が、ここにも該当すると言えないであらうか。

つぎに、著者は基督者であるから、イエスの山上の垂訓の著名な箇所「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。」^(註三)以下が理由として考えられる。しかし、この辺りは、現代語で言えば、生活問題を心配するな、ということを楽ししい古典的表現で述べられたもので、食道楽とは筋合いが違うと言わなければなるまい。

なお、日本にも、著者と一見同じ系譜に属するように見える「食い倒れ」とか「食い辛抱」などの言草があるとしても、前者は他の事が駄目になる、後者は他の事を辛抱(犠牲)しなければならぬの意であって、著者の言うようなその事自体の悪徳性は強調されていないと思う。もっとも「美味求真」などと標語を掲げて積極的に根拠づけることには多分の疑問があるとしても、また美食は健康上よろしくないとしても、それは程度問題であらうし、何れにしても美味は人間の本能でもあり、無邪気な趣味とも言えるのであって、著者の言うほど難詰さるべき悪徳とは考えられない。

最後に女性観の立場から本節を考察する。元来「女らしい性格」と呼ばれる女性観は、その名称からも推測できるように、男女別を身体的・生理的の部面だけに限るものではなく、精神的・道徳的部面においても男女を峻別する両性観の上に立つものである。このことの批判は最後の結論の部に譲るが、本節ではそれが食道楽にも適用されて、同じ悪徳でも女性の場合はさらにひどい悪徳となったわけである。

(註一) ベーベルによれば、人間の自然的欲望と精神的欲望とは同一の段階にあって相互に影響し合うもので、両者の間に高級・

低級の区別をするのは誤りだと、自分と同じ主張のマルチン・ルターの言葉を引用して強調している。(A. Bebel, Die Frau und der Sozialismus, 1923, S. 96. 草間訳『婦人論』上巻、岩波文庫、昭和二十七年、一三八―九頁。

但し、卑見によれば、感覚的行為(自然的欲望)の場合は制限が付される。例えば電車・バス等の中でガム・キヤラムルの頬を口に入れて、もぐもぐさせる行為は「場の観念」を欠くものとして排斥されなければならない。

(註二) 新約聖書、テモテへの第一の手紙、第四章第三―四節。

(註三) 新約聖書、マタイ伝、第六章第二十五節。

九

『目下流行の御婦人たちの態度・振舞から察すると、彼女たちは容姿の美しさを精一杯に誇示したり、公の場所に何時も出ているように男達に見せかけたり、男同志の会話の場合と同じ無遠慮な自由さで男達とお話したりすることによって、一言で云えば、男にできるだけ近く似せようとすることによって、彼女たちは男性に対する優越権を取り戻そうと期待しているもののようである。しかし今少しの時と経験をもってすれば、そうした期待と振舞の阿呆さ加減を御覧に入れることになるだろう。』

まず字句から見ると、男性に対する女性の優越権を取り戻す(regain)という表現は、かつて母権制社会が存在したという多くの歴史家が支持する学説を、当時の御婦人たちばかりでなく、この遺訓を書いた医学者のグレゴリ博士も認めていたことを示すものであろう。

御婦人たち (the ladies) に関する本節前半の描写は、当時すでに英国では、いわゆる「新しい女」(a new woman) が出現していたことを示すものである。この遺訓が実際に書かれたと推定される一七七〇年頃といえは、

ロンドンに歴史上最初の「青鞥クラブ」(the Blue Stocking Clubs [Society])が形成されてからすでに約二十年を経過しているのだから、このこともよく一致する。フェミニズムのバイブルと言われるメアリー・ウォールストンクラフトの『女権の擁護』^(註)の出版に先き立つこと約二十年前であり、言わば近代フェミニズムの萌芽期であったのである。

この「新しい女」に対する著者の批判の態度はどうであるか。それは前記引用文の最後に明瞭に書かれているように、「時」の審判者の手にかかって間もなく正体を暴露するだろうと、皮肉にたみかけて突っ放しているだけである。男と女とは身体的・生理的な差だけではなく、すべてにおいて別種なものとする強い信念に生きた著者の女性観からすれば、初から真面目に取り合う気がしなかったのも、けだし当然であったであろう。著者の女性観は勿論当時の支配的な女性観であったのであって、そのことは「青鞥クラブ」という名称が、当時の英国で世間の人たちに嘲笑的につけられた綽名^{あだ名}(epithet)であったことにもよく現われている。^(註)

(註一) May Wollstonecraft, A Vindication of the Rights of Woman, 1792.

(註二) 「青鞥」(Bluestocking)という名称の起源・意味の変遷などについて、概略を記せばつぎの通りである。一七五〇年頃イギリスの女流作家で美貌の才媛でもあったエリザベス・モンタギュー夫人(Elizabeth Montagu, (1720—1800))がロンドンでサロンを開いた。そこに出入する会員の多くは婦人であったが、バーク(Edmund, Burke)やガリック(David, Garrick)のような当時の著名な文人もいた。彼等の特徴の第一は、それまでの社交婦人の常習であったカルタ遊びとおしやべりにとって代って、文芸上の談話やその他の知的な楽しみをすることであり、ここに因習に対する先ず第一の反撥が見られる。また会員の中には、わざとらしく服装を質素にする人達も居たが、これは従来の婦人の虚飾に対する反撥であつたらしい。またその中には、博物学に関する小著を書いているスティリングフリート(Benjamin Stillingfleet)という常連の男がいた。彼も至って地味な服装ではあったが、何時も青色の靴下をはいていた。当時のイ

ギリスでは公式の場では白色の靴下をはく習慣であつたので、これも当時の因習に対する反撥であつた。そのうえ彼は会話術がすばらしく巧みで、一座の人気者であつたしく、「ブルー・ストッキングズが居ないと会が始まらない」という言い廻しがよく使われた。そういうわけで仲間の人達から、まず彼個人が「ブルー・ストッキングズ」と綽名をつけられた。

クラブの名称として最初に世間の人達から「ブルー・ストッキング」と綽名されたものは、前記モンタギュー夫人のサロンに出入する連中に対してであつた。やがてその名称が、当時相当多くあつた同種の他のクラブにも及ぼされることとなり、ついにこれが普通名詞となつてしまつた。

その後になつてこの言葉は、特定のクラブ員ではない単なる個人としての女をかれこれ批評するのにも用いられた。しかしこの場合でも、文学的・知的な事柄に対する見せかけの (affected) 関心をひけらかす女に対してであつて、最初の侮蔑・嘲笑の意味は依然としてそのままであつた。全般的に保守的な空気の濃厚な英国民氣質から来るのであるう。

これが明治末年日本に受けづがれて「青鞥社」・その機関誌「青鞥」・「青鞥派」などの名称が生れたわけであるが、日本では「新しい女」とは言われたが、「青鞥」という名称それ自体にはイギリスにおけるような侮蔑・嘲笑のニュアンスは殆んど見られないようである。もともと日本では初め「紺足袋党」と訳されていたらしいが、同人の生田長江の発案で「青鞥」という新しい訳語がつくられた。これは、メーテルリンクの「青い鳥」にひっかけたようでもあり、語呂もよく、翻訳ならざる（鞥は皮靴）名訳であつたと言えよう。

十

『立派な資質を持った男性の心情に及ぼす立派な女性の影響力は、正に彼女が想像する以上のものなのだ。そうした男性は彼女と共なる楽しい幻想に敏感であつて、それをかき消すことも出来ないし、それをかき消すことを望

みもしない。しかし、彼女がそうした心情的魅力などはそっちのけにしようと決心すなら——それは確かに出来ることなのだが——その途端にその天使のような美女も至って月並な女となってしまうことだろう。』

本節は、女性の精神美・教養美が立派な男性を魅する力の偉大なことを、著者の人柄をよく反映した論調で説いたものである。しかも第三人称を用いて、客観的真理の形式で説き、それがやがて教訓の役目を果たさせようとする婉曲な語法である。引用文中の『心情的魅力をそっちのけにする』とは、裏から言えば衣裳や化粧やアクセサリーなどに専念することで、そんな月並な女のするようなやり方では到底立派な男性の心をとらえることは出来ないと教えている。その背後には自分の娘に高度にして永続的結婚をさせようとする父親としての念願が秘められている。というのは、いわゆる肉体美は青春の後退とともに消え失せるが、心情的な美は終生つきまとうものだからである。

しからば、立派な女性の心情的魅力の偉大な力の根拠を著者はどこにしているか。まず第一に『彼女が想像する以上のものだ』と述べているのは、男としての自分の体験から割り出したものと言える。第二に彼女と共なる楽しい幻想はかき消すことも出来ないし、もう男はのがれられない程のものだと説明しているが、これもおそらく自分の体験から述べたものであろう。こうなれば、それはおそらく恋愛と言えらうし、恋愛のそうした性質については「恋のとりこ」という言葉がある程それは周知の事柄でもある。

グレゴリ博士の妻は美貌の外に機知に重んじたと記されている。この妻と結婚するに至るまでの自分の体験が主となって、この教訓が生れたものと思う。体験が基調になっているだけに、この教訓には絶大の自信あるものの如くである。しかし、心情的魅力も相手に実際の影響力を及ぼすためには、相手に認識されるための外形的・象徴的表現をとらなければならないわけであるが、その過程の説明には欠けている。これは結論に自信があり過ぎて、つい途中の説明は抜けたものであろう。これは現代でも重要な意味を持っていることでもあるので、クレオパトラの魅力についての一つの見方で補ってみることにする。その見方によればクレオパトラの絵や調像などで現存しているものを見

ても、造型的にはどうもそれ程美しいとは思えない。それにもかかわらずあの魔力と言ってもよいほどの偉力を振ったのはなぜであろうか。おそらく、彼女の中にある心情的なものが、言語・表情・愛嬌・素振り・仕草・態度・物腰等々に渾然一体となって象徴化され、そこに何んとも言えないダイナミックな流動美が現出されたところにあるだろうと言われる。こうした事の理屈は事新しく喋々するまでもなく、普通の女でも心得ていることなのだが、月並の女は中身が無いのに外形だけを真似するために、心ある男子にすぐ看破され、かえって滑稽なものが出来上がることになるのである。このやり口は通常「見せかけ」→「気取り」と呼ばれ、これを戒めた女性訓は西洋に非常に多い。本節は一言でいえば、イギリスの古諺「心美しき者は姿もまた美し」^(註)を教えたものである。

最後に女性観の立場から考察する。右の古諺が教えるように、心の教養が象徴化されることは、当然でもあるし、望ましいことでもあろう。「人は中年以後の自己の風貌に対して責任を持つ」とはこのことと意味する。特に衣裳・化粧・アクセサリーなど外形的技巧にとられ勝ちな女性にとっては、永遠に省みらるべき真理であろう。しかし、たとい精神美の場合でも本節の教訓のように、魅力・魅力と言って常に魅力を考慮の中におくことは、その事自体が邪道であるばかりでなく、それ自体主体性の喪失を意味する。男を魅惑し男に愛されることによって、女はその生存を完うすべきものだとする寄生論的女性観が背後にあるから、このような教訓が生れてくるのである。本節の教えは高度化されているが、それも露骨に言ってしまうと、「高級な魅力によって高級な男をつかめ」というだけのことである。東洋でも古来いみじくも女性を「藤」^{ふじ}にたとえた。藤はそのあでやかな花をつけて辺りの目を惹き、自分分は樹木などにまつわりついて寄生的生活をしているからである。

(註) Handsome is that handsome does.

『女性に期待されるあどけない上品さの中には生来の威厳があるもので、それは男どもの馴れ馴れしい無遠慮さから自然にお前たちを守ってくれるものであり、しかもそれは、人間のあらゆる自由から自分自身を神聖なものとして〔純潔に〕守ることが自分の重大事である、などという反省以前に感知されなければならないのだ。』

以上の訓えを分解するならば、まず「あどけない上品さ」(ingenuous modesty)についてである。これが異性に對する絶大な魅力の一つであることは、大概の男性の実感するところであり、カール・ヒルティ (C. Hilty) なども無邪気さを失ってしまった女は女性としての魅力を全く喪失したものだ、とまで極言しているが、これについてはもはや多言を要しないであろう。これは男の側から見た得手勝手な理屈である、と反對する御婦人もあるかも知れないが、男の場合は、この世の苦悶・苦惱に打ちひしがれて深刻・悲壮な顔つき(苦みばしった面相)をしているところにも、男性美の一面が見られると考えられているのである。

しかし、本節の敘述の重点は「あどけなさ」の魅力の強調にあるのではなく、それが自然から賦けられたものであるということである。これが特に十八世紀に盛んであった自然法思想の現われであり、これがこの教訓つまり「女らしい性格」の哲學的基礎であることは本論第二節の末尾でも述べたところであり、したがってこの思想は本書の随所に出てくるわけなのである。これは、ここに使われている「あどけない」(ingenuous)は、その語源の意味が「生れつきの」・「生来の」(native)であるところにも現われており、さらにこれは東洋でも同様で、それは天真爛漫の「天」によく現われている。

以上は論理的には本節の序説に過ぎず、本節の核心はつぎの点にある。すなわち、この「あどけない上品さ」の中には、これも生来の (native) 威厳が加味されている、ことを著者が訓えている点である。けだし、造物主は異性に

対する魅力の一つとして女性特有の「あどけなさ」を与えたわけなのだが、しかしこれだけでは、やたらな男の劣情の犠牲となってしまう危険性が多分にある。そこで造物主は一計を案じて、それに天来の威厳をも加味するという用心深い態度をとったのである。しかも、この威厳たるや、やたらな男が口説こうとして馴れ馴れしく近寄ることを許さない天然の防壁 (natural protection) だと教えている。まことに天真爛漫な少女の姿は、男の劣情などとは、およそ無縁な造物主の芸術作品とでも言えようか。

さて本節の最後に移るが、あどけなさの中に含まれる天来の威厳がやたらな男を寄せつけない天然の防壁だとする以上の論理構造をば、人間の自由を濫用しないで自分を純潔に守ろうとする道徳的反省以前に、言わば本能的に感知 (feel) しなければならぬ、と訓えていることには批判の余地がある。というのは、無邪気というものは、それを本人が感知したり意識したりするとき最早失われている、と普通に言われているからである。本人が気づいていないからこそ、なんとも言えない天来の高貴性を宿しているのだと言えよう。かつて、ある女子学生が筆者に向って、いかにも誇らしげに「私は無邪気です」と語ったが、それは自分に邪気があることを自ら暴露しているにすぎない。

最後に女性観の立場から考察するならば、この教訓の背後にも当時の貞操重視の思想がのぞいている。しかし、貞操を防護するためには、世間普通の教訓のように、殊更用心深い態度をとる必要はなく、天真爛漫さの中にある生来の威厳が天然の防壁だと教えていることは注目し値する。これは十八世紀に盛んであった自然法思想の反映とも見られようが、同時に永遠の真理とも言えよう。真接には、異性との交友関係において、娘に安心と自信を与えようとしたもので、この点すでに述べた第七節後半の教訓と同じことになる。著者は娘を淡淡とした明るい伸び伸びした娘に仕上げようとしている。これは貞操防護になるだけでなく、同時に秀れた男性を惹きつけることにもなると考えたものと思われるが、こうした言わば積極的教訓は、「べからず」式教訓の氾濫の中で高く評価さるべきであらう。

『さて次のことにお前たちの注意を喚起しておきたい。すなわち、あの高雅な気品というものは、それ自身が一つの素質であるというよりはむしろ、他のすべての素質を高度に磨き上げたものだということである。一言でいえば、生活態度・振舞の中に審美眼が成就したものである。そうした生活態度・振舞の極度に優雅で愛くるしい形態の中にこそ、あらゆる美德・あらゆる秀性が宿るものなのだ。お前たちはおそらく次のように思うかも知れない、すなわち、私はお前たちの氣質の中から天性の閃めきをすべて取り除き、お前たちをすっかり人為的に作り上げようとしているのだと。それはとんでもない話だ。お前たちの心にも振舞にも、最も純粹な無邪気さを保っていてもらいたいのだ。お前たちが、自負心ではなく尊厳さを、卑屈ではなく優^{やさ}しさを、見せかけではなくあどけない上品さを身につけてもらいたいのだと考えているのだ。ミルトンも私と同じ女性観を持っていたし、彼がエヴァについて述べた次の句にそれが現われている、

「彼女の歩みにはすべて優雅があった、

彼女の眼差^{まなざ}しには天国があった、

仕草のすべてには威嚴と愛があった。」^(註二)

本節は第十八世紀の西欧が期待した女性の理想像が、積極的に華麗に展開された部分である。理解は容易であるが、評論の便宜のために分析すればつぎのようになるであろう。

一、女性のあらゆる特質・徳性が高度に磨きあげられ、しかも統合・昇華されたものとして、高雅な気品(エレガンス)という理想像と掲げる。これは使徒パウロが基督者の積極的諸徳の統合として「愛は、すべてを完全に結

ぶ帯である」^(註二)と説く論法に似ている。

二、エレガン스는単なる心の状態であってはならず、それが實際生活上の態度・振舞・仕草となって具現・象徴化されなければならない。

三、エレガン스는修練の賜物であるだけに、その修練のために天性の閃めきを失ってしまう危険性がないとは言えないが、そんなことではない。すなわち、天真爛漫・それに伴う天来の威厳・優しさ(affability)などは、損われずに持ち続けていなくてはならない。

四、以上は世界的大詩人ミルトンの代表作の中に展開されたものと同一であることを述べて、自分(父親)の書く女性の理想像が決して奇異なものではないことを根拠づける。

以上に対してまず第一に、女性の道徳的修練の観点から考察するならば、一見両極に立つと考えられる諸性質・諸徳性をも統合・止揚し、渾然一体となった境地を作りあげ、しかもこれを第三者の眼前に実証しなければならぬのであるから、これは至難の業・「高嶺の花」と言わなければならない。これは理想像というよりは空想像、否ラングダン・デヴィーズによれば、これは神話(myth)^(註三)なのである。

第二に、社会科学的にこれを見るならば、特権階級的・貴族的臭気分々たるものがある。事実、本書を含めて、当時の無数の詩・教訓・金言となって現われた「女らしい性格」という女性の理想像は、当時の有閑階級の婦人に向けられた教育理念であった。しかし敘述の形式が女性一般を対象としたためか、漫然と広く一般女性の理想像と考えられるに至ったものらしく、このことがこの女性観の一部は現在尚存続し、踏襲されていることの一原因と考えられる。^(註四)なお本節では、天性の閃めき(spark of nature)が強調されているが、これは社会科学には第十八世紀に盛んであった自然主義思想の反映と見ることができる。しかし、これは時代を超えて男性にも女性にも妥当する・文化に埋没した人間によってとかく閑却され勝ちな真理である。

第三に、女性観の立場から考察するならば、本節全体に漂う雰囲気として、女性を一つの芸術作品に仕上げて男性が鑑賞・享受しようとする心構えが観取される。事実「女らしい性格」と呼ばれる女性観は、男が考え出し女を従わせたものであった。この態度は次節において露骨に現われ、絶頂に達している。

(註一) ミルトンの『失樂園』(Paradise Lost) 第八巻、四八八―九行。原文はつぎの通り。

Grace was in all her steps, heaven in her eye.
In every gesture dignity and love.

(註二) 新約聖書、コロサイ人への手紙、第三章十四節。

(註三) John Langdon - Davies, A Short History of Women, 1948, p. 218.

(註四) このことは、江戸時代に『女大学』を始めとして数多出版された女訓書が、実際は特に武士階級の娘・嫁・妻に対してきびしく強要されたにもかかわらず、敘述の形式が女性一般を対象としたことで、西欧の場合と同様の結果となったことと同工異曲である。

十三

『しかし、たとい立派な健康が人生の最大の祝福の一つであるとしても、決してそれを自慢することなく、無言の感謝をもってそれを楽しみなさい。われわれ男達は、女は本来柔軟で繊細なものであるという考えと、それに照応して体格の方も繊細なものだという考えとを、きわめて自然に連想しているわけなので、ある御婦人が自分の体力が強いこと・ものすごい食欲・過労に耐え得る力などを口にするのを聞くと、われわれ男達は嫌気がさしてくるのだが、御本人はどうもそれに気がついていないようである。』

本節は、著者による言わば女性美論の展開である。字句による表面上の理解はきわめて容易である。ただ末尾で婉曲な諷刺を駆使しているのは、繊細な美意識の持主であるような男性を惹きつけることの出来る娘に仕上げようとの

親心から、どうしてもこの教訓を身に付けさせてやろうとの配慮に基くものだと思う。

この女性美論は著者グレゴリ博士独特のものではなく、きわめて一般的であり、日本でも「瓜実顔に柳腰」・「撫肩・富士額」という表現で賞美された。この美の系譜は現代にまで継承され、その表現は欧風化して「スマート」となっている。

しかのみならず、この美論には立派な哲学的基礎付けも存在する。それは「美は実用性を欠くところにのみ成立し得る」ということである。カントによれば、「対象に関する美的快感はその対象の有用性の観念によることは出来ない。」^(註一) ショーペンハウエルによれば、「すべてのものは、ただそれがわれわれに關係(利害關係)しない限りにおいてのみ美である。」^(註二) 波によれば、利害關係とは実用性・有用性(die Nützlichkeit)のことであり、より根本的に言えば刺戟性(das Reizende)のことであり、すなわちわれわれの意欲を刺戟し、欲望満足に役立つ性質のことであり、効用と言っても同じである。ショーペンハウエルは、「効用のない月の美しさ」・「美しい寺院は住宅ではない」など数々の実例を挙げているが、彼の論によれば美の存在するところ、それが皆実例になるわけである。この論はわれわれの卑近な日常生活でも体験されるところであり、筆者の念頭にとりとめもなく浮んだものだけでも、果樹園は庭園にならない、稲や麦の花は問題にされず、ダリヤ・チューリップなどの効用のない草花が賞美される、金魚や鯉は食用にされない、などがある。特に御婦人に即して言うならば、同じ貴金属・宝石類でも腕時計に使うよりは腕輪・指輪・首飾り・耳飾りなどに使う方が美的効果が上がる。さて以上の美論を本節に適用するならば、女性の健康・体力の強大は労働力を意味し、経済的生産力を担うものであるから、効用の最大なものと言わなければならぬ。したがってそこには到底美は成立し得ないことになるのである。なお序に言えば、この美論は男性美にも妥当するわけで、それを日本の川柳はいみじくもつぎの通り表現した、

「色男 金と力は無かりけり」。

さて本節の教訓を女性観の立場から考察する。女性の諸属性の中から「美」を抽象・拡大して、これを中心に据えることは東西軌を一にする古来の慣習ながら、これは女を一つの芸術作品として鑑賞しようとする男の態度を示すものである。周知の通り、カントによれば、究極の価値あるものはただ人格 (Person) であり、それ以外の宇宙間ありとあらゆるものは物 (Sache) にすぎない。芸術作品といえども物にすぎない。日本の言草「彼は彼女を物にした」・「わたしは貴方の物なのよ」などは、いみじくも事の真相を適確に表現したものである。かくして女を芸術作品として見る態度は、女が物となつて自分を提供することの代償として、宿主に寄生することになる寄生論的女性観そのものである。

最後に社会科学の立場から考察するならば、すでに再三述べたように、本書の時代はこのような寄生論的女性観の時代であつた。そこから寄生主義的結婚主義も生れた。それが本書にも反映して、自分の娘を芸術品としても秀れたものに仕上げ、秀れた男性に嫁がせようとした親心となつて現われたわけである。社会制度の偉力の前には個人は結局無力であり、ヘーゲル流に言えば人は所詮「時代の子」にすぎず、自分の娘の生涯の安泰・幸福を念願する限りにおいて、本節の教訓は止むを得ざる「必要悪」であつたのである。現代においても、「スマート」などと言って驕ぎ立てる時その度合いは、同時にこの寄生的女性観の残存の度合を物語るものである。

(註一) I. Kant, Kritik der Urteilstkraft, Reclam, S. 73.

(註二) Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung, Sämtliche Werke, 1922, 3. Bd., S. 428.

A Study of the Typical View of Womanhood in the 18th Century Europe (II)

Résumé

The text of this theme is a very famous little book, entitled *A Father's Legacy to His Daughters*, written by Dr. John Gregory (1724-1773), professor of medicine at Edinburgh University.

At first we consider the advices in the text and then inquire into a view of womanhood' the so-called Female Character, which lies in the background of the advices. The advices in the second part of this study are as follows.

7. Consider every species of indelicacy in conversation as shameful in itself, and highly disgusting to men.
8. The luxury of eating is a despicable selfish vice in men, but in women it is beyond expression indelicate and disgusting.
9. The denunciation of the new women who appeared in England at that time
10. The emphasis of the power of a fine woman over the hearts of men of the finest parts
11. There is a native dignity in ingenuous modesty of women, which is their natural protection from the familiarities of the men.
12. The emphasis of the elegance which is not so much a quality in itself as the high polish of every other
13. Men naturally associate the idea of female softness and delicacy with a correspondent delicacy of constitution.